



ALWAYS FOR HUMANS.

いのちを見つめ、
人間を支える。

洛和会
ヘルスケアシステム
CSR REPORT
2023-2024



やさしい社会を創造する。

医療、介護、保育、教育など、各分野のプロフェッショナルが集結する
洛和会ヘルスケアシステム。

それぞれの職種が持つ技術と誇り。地域に対する無限の感謝。

それらの総合力によって、いのちを見つめ、健康を支え、暮らしに寄り添いながら、
やさしい社会の創造に貢献します。





TOP MESSAGE

日々の活動そのものが、 社会的使命を持っている。

洛和会ヘルスケアシステムは、5つの病院をはじめ、介護施設、保育施設、看護学校など188拠点を運営する、総勢6,441名の組織です。私たちは、提供するサービスそのものが社会的使命を持っているという強い自負のもとに「やさしい社会を創造する」というパーパスを掲げ、日々活動に従事しています。職員一人ひとりの一歩は小さくても、6,441名全員がそれぞれの一歩を踏み出すことで、大きな動きになると信じています。今後とも、決して組織の内部にとどまることなく、私たちの活動に関わるすべての皆さまとともに、社会的責任を果たすことをお約束し、今日も、これからも、歩んでいきます。

洛和会ヘルスケアシステム
理事長 矢野 裕典



おもな活動報告

令和6年能登半島地震の復興支援

2024.1.2

支援対策室を設置

現地状況の共有や今後の方針などを早急に協議しました。

2024.1.4

災害派遣医療チーム「DMAT」出動

京都府の要請を受け、洛和会音羽病院 救命救急センター・京都ERより、医師や看護師などで構成される災害派遣医療チーム「DMAT」が出動(1月7日帰還)。



2024.1.10

支援物資の輸送開始

先に2名の職員が被災地入りし、現地で支援物資を受け入れる体制を整備。約17,000食分の非常食と約900リットルの飲料水を積み込み輸送開始。翌11日、現地に到着しました。



2024.1.17

2回目となる「DMAT」出動

洛和会丸太町病院から医師1名、洛和会音羽病院から医師1名、看護師2名、救急救命士1名、理学療法士1名の計6人を派遣しました(1月22日帰還)。



2024.1.24

3回目となる「DMAT」出動

洛和会音羽病院から医師2名、看護師1名、救急救命士1名、理学療法士1名の計5人を派遣しました(1月29日帰還)。

2024.3.13

音楽療法士による慰問コンサート

洛和会京都音楽療法研究センターの音楽療法士を派遣し、七尾市の恵寿総合病院をはじめとする各所でミニコンサートを開催。

2024.1.9-3.29

看護師を随時派遣(計20名)

このたびの地震で被害を受けられました皆さまには、心からお見舞い申し上げます。
災害でも医療を止めない。そんな思いを持つ
現地の病院や介護施設などを支援するべく、
これからも私たちにできることを実践していきます。

子育て支援 各種取り組み

- ➔ 男性育児休業の計画的付与制度
- ➔ 子どもの出生時休暇制度の拡充
- ➔ 子どもの看護休暇
- ➔ 出産祝金
- ➔ 保育手当(院内保育料が実質無料)
- ➔ 学童保育手当
- ➔ 家族手当
- ➔ 診療費補助
- ➔ 育児支援助成金制度
- ➔ 入学準備助成金制度
- ➔ シングルマザー・ファザー支援制度
- ➔ ベビーシッター派遣サービス割引券購入制度など



仕事と子育てを両立する職員にとって働きやすい職場環境を整えるべく、様々な子育て支援制度を導入。国が定める制度とは別に男性職員に連続14日間の育児休暇を付与するなど、各種手当・休暇付与などの充実を図りました。

おむつ定期便の実施



2023年11月から、0歳の子どものいる山科在住の職員の自宅に、毎月定期的に無料でおむつが届く支援策を開始しました。おむつのサイズやメーカーを選べるほか、私たちが運営する資材センターの職員が配達するので、おむつ代の負担軽減や、買いに行く手間が省けるだけでなく、職員とのコミュニケーションによって、休職中でも職場とのつながりを感じられるという声をいただいています。

健康経営優良法人ホワイト500に認定



経済産業省と日本健康会議が推進する健康経営優良法人認定制度において、特に優良な健康経営を実践している大規模法人として上位500社にランクインし「健康経営優良法人2024 ホワイト500」に認定されました。



受動喫煙防止及び卒煙活動



職員とその家族、そして周囲の皆さんの健康を守るため、積極的に受動喫煙防止及び卒煙活動に取り組んでいます。2023年5月より就業時間中の喫煙を禁止し、敷地内を全面禁煙にしています。2026年3月末までに全職員の喫煙者ゼロを目指しています。

医療アクト 対応実績

2023年4月～2024年3月25日の各種データを集計。患者数は延べ人数です。

救急対応件数



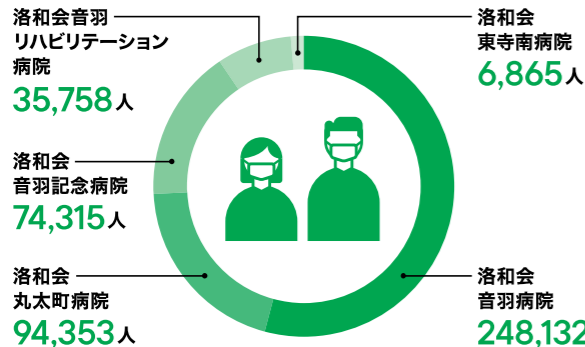
救急車



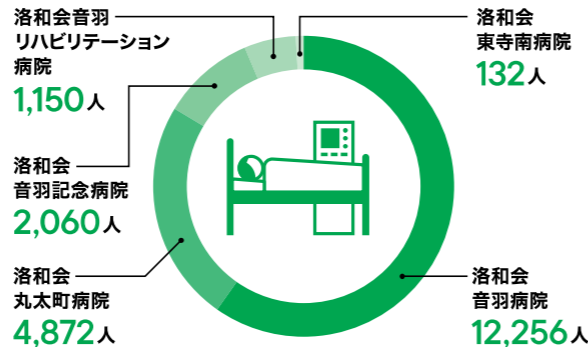
ウォークイン



年間外来延べ患者数



新規入院患者数



平均在院日数



年間手術件数



洛和会丸太町病院



洛和会音羽病院



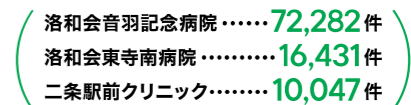
洛和会音羽記念病院



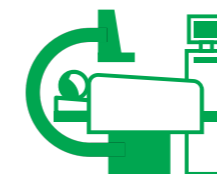
年間透析件数



外来



年間心臓カテーテル件数



検査



治療



訪問リハビリ件数



洛和会音羽リハビリテーション病院



口腔ケア件数



洛和会音羽病院



介護アクト サービス別年間利用者数

2023年4月～2024年3月25日の各種データを集計。施設数は集計当時のもの。患者数は延べ人数です。

在宅サービス



計 **525,963** 件 /

通所介護・ケアマネ

[計 37 力所]

\ **227,535** 件 /

訪問看護

[計 15 力所]

\ **149,315** 件 /

訪問介護

[計 8 力所]

\ **149,113** 件 /

地域密着型サービス



計 **230,066** 件 /

グループホーム

[計 31 力所]

\ **195,347** 件 /

小規模多機能/看多機

[計 6 力所]

\ **34,719** 件 /

施設サービス



計 **443,225** 件 /

介護老人保健施設

[計 4 力所]

\ **120,604** 件 /

特養・地域密着型

[計 6 力所]

\ **170,643** 件 /

高齢者住宅・サ高住

[計 7 力所]

\ **107,827** 件 /

介護医療院

[計 1 力所]

\ **44,151** 件 /

子ども未来アクト 対応実績

2023年4月～2024年3月25日の各種データを集計。



施設数

保育園

計 **11** 力所

児童館

計 **4** 力所

児童園

計 **1** 力所

学童クラブ

計 **2** 力所

月平均利用者数

保育園

463 人

児童館

359 人

児童園

90 人

学童クラブ

182 人

病児保育について

病氣中または、感染症の回復期のお子さんを一時的にお預かりする病児保育も行っています。隣接する洛和会音羽病院の小児科による回診もあるので安心です。

健康アクト 対応実績

2023年4月～2024年3月25日の各種データを集計。

健診センター年間利用者数

\ 計 **24,062** 人 /

洛和会東寺南病院
健診センター
9,950人

洛和会音羽病院
健診センター
14,112人

企業出張(巡回)健診 年間利用者数

\ 計 **63,455** 人 /



企業の健康経営を支援

働く皆さまの健康増進はもちろん、生産性の向上、離職率の抑制、企業イメージの向上に貢献します。

福利厚生の実績

2023年4月～2024年3月25日の各種データを集計。充実した福利厚生制度の積極的な活用を推進し、職員満足度の高い「日本で一番働きたい」ヘルスケアグループを目指します。



リフレッシュ休暇取得率



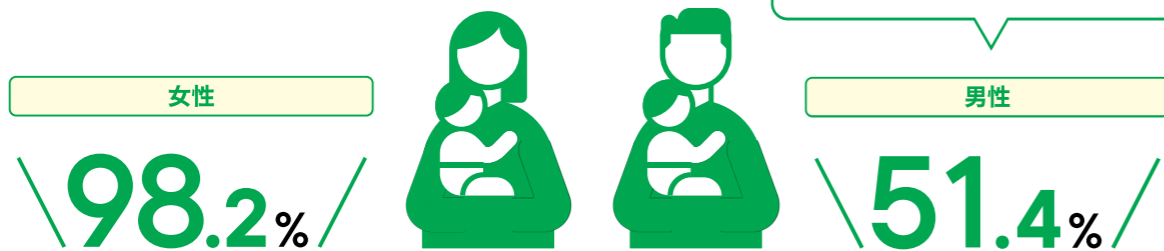
有給休暇取得率



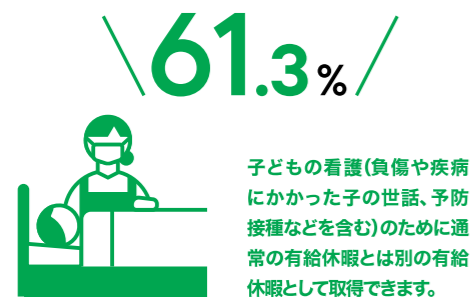
育児休業取得率

【参考】2022年度(10月1日時点)における
育児休業取得率の全国平均は、女性80.2%、男性17.13%
※厚生労働省の令和4年度雇用均等基本調査の結果より
(2023年7月発表)

2024年度より、男性の育児休業の計画的付与制度を実施。育児取得率100%を目指し、積極的に取得を推進しています。医師含め2人に1人が取得しています。



子どもの看護休暇取得率



※3歳未満の子どもの看護は最大10日間/年、小学校卒業までの子どもは最大7日間/年、1時間単位での取得も可能です。

副業・兼業制度利用者数



職員の常勤人数

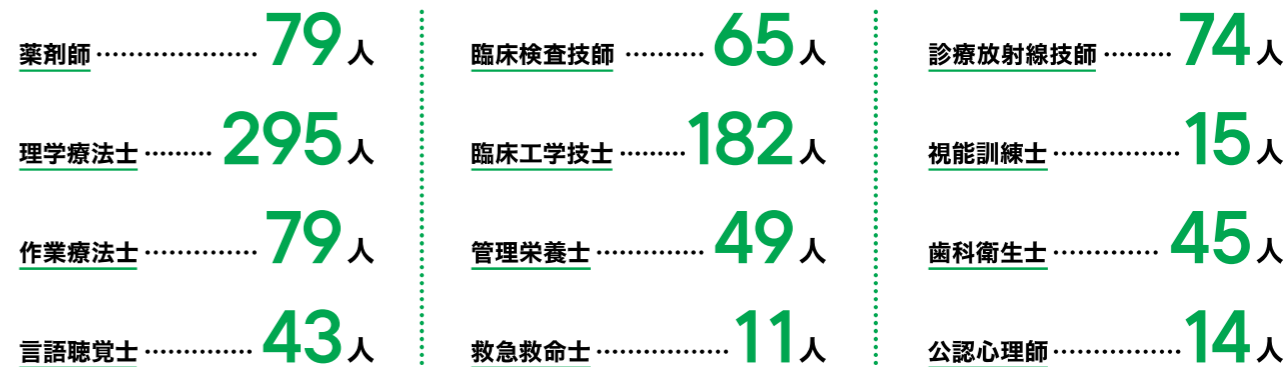
多様な人材が幅広い事業の中で活躍することで「やさしい社会の創造」を目指しています。



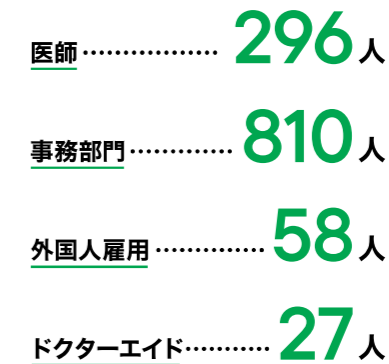
看護部門



技術部門



介護職員



COVID-19対応をふり返って思うこと

2020年1月、日本国内で初めて感染者が確認されて瞬く間に感染拡大をした新型コロナウイルス感染症(COVID-19)。先の見えない不安が募る中、今こそ社会のために医療を届けるという思いのもと、私たちもチーム医療でパンデミックと向き合いました。今回は、洛和会音羽病院の感染症科の医師として最前線で治療にあたった井村春樹先生に当時のことをふり返っていただきました。

正しい情報を集めることと、あるべき体制の構築を急いだ

—— 2020年当時のコロナについて専門医としてどのように受け止め、どのような役割を果たそうとしたのでしょうか？

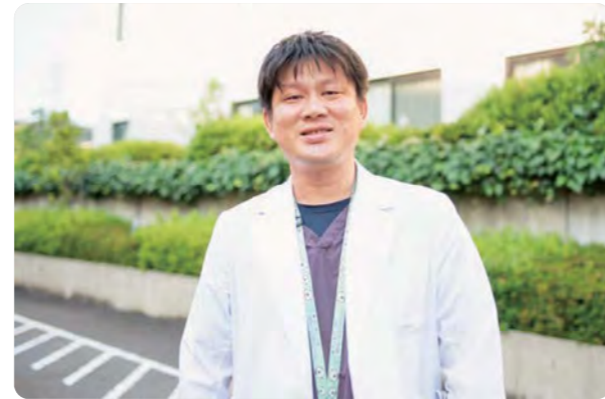
当時は、具体的な臨床の経過や有効な治療薬に関する情報もなく感染経路も読めないなど、今よりも不確定要素が多かったので具体的な予測が立てにくい状況でした。その“わからなさ”が、生活者にとっても医療従事者にとっても恐怖だったと思います。なので、最初の自分の役割は、正しい情報をクイックに収集すること。国の発表や論文だけでなく専門医同士の横のつながりも活用しながら情報を集め、そこでわかったことを職員に伝えるようにしていましたね。

—— 情報収集とあわせて取り組んだことも教えてください。

まずは、院内感染が起きたときの初動をどうするのか。そのフローを決めていきました。病棟をどのようにスクリーニングするか、陽性者をどう隔離するかなど、感染の広がりを最小限にとどめる仕組みを考えていきました。あとは、新型コロナ治療薬のガイドライン策定の班に加わって、エビデンスに基づきながら治療薬のアップデートをして推奨基準をつくることをしていきました。そこでキャッチアップできるタイムリーな情報を踏まえながら、最終的にクリニカルパスをつくっていきました。

—— クリニカルパスによって院内の動きにも変化がありましたか？

そうですね。クリニカルパスを運用したことで、軽症や中等症の患者さんに対するコロナ治療を標準化することができたと思っています。当初は感染症科や救命救急センター、呼吸器科の先



洛和会音羽病院 感染症科
診療副部長 兼 部長代理 / 井村 春樹

生たちでコロナ対応をしていたのですが、クリニカルパスがあることで他の診療科の医師や看護師もある程度自分のやる事が具体的にわかります。院内の各診療科の先生方も積極的に診療にあたってくれて、多くの患者さんに対応することができたと思います。

急激に高まる医療ニーズに、チームで奮闘する日々

—— 現場でコロナと対峙しながら、特に困難だったことや葛藤したことがあれば教えてください。

思い返すと、デルタ株のときは心理的に相当疲弊しましたね。その当時、音羽病院に空いている人工呼吸器が2台しかない状況で、京都市内でもレンタルできないくらい機器が足りていませんでした。その2つのうち1つが故障してもアウト…。命の優先順位を自分が決めなくてはならない。そんな状況になりかけたときもあって、私自身追い詰められていました。

—— 医療崩壊の一步手前、といった感じでしょうか？

どうでしょう…。医療崩壊って、ロビーに患者さんが押し寄せて医師たちが息を切らしながら対応する混乱したイメージがあるかもしれませんが、実際はもっと静かに、ひっそりと医療は崩壊します。病院に行きたくても行けない。行こうとしても受け入れてもらえない。そうやって病院の外で生活者が途方に暮れている状態こそ、医療崩壊のリアルです。

—— 1つの病院単位ではなく複合的な要因で、社会全体で医

療崩壊が起こるのですね。とはいえ当時は救急受け入れも過去最大だったと聞いていますし、積極的に患者さんを受け入れようとしていたのではないのでしょうか。

そうですね。当時は大阪や滋賀といった遠隔からの救急受け入れも積極的に行いましたが、それでも満床のため申し訳ないけれどもお断りしたケースもあります。断られた当事者からすると医療崩壊はしていた、そう言われても仕方がないと思います。あと救急受け入れに力を入れたのは、音羽病院がコロナ禍であろうと三次救急としての役割を担わないといけないからです。コロナ患者さんと非コロナの患者さん両方を受け入れていく使命があるのです。そのあたりを踏まえつつ、安全を確保しながら運用していました。

—— コロナ禍での洛和会ヘルスケアシステムについて、心強く感じたことがあれば教えてください。

医療従事者として心強かったのは、資材センターです。マスク、防護具、抗原キットなどなど、当時枯渇していたあらゆる医療用具をかき集めてくれて、感染症と向き合う現場の人間にとってはすごくありがたかったですね。現場においても、組織力という意味では、頼もしさを感じるが多かったです。たとえば、発熱外来で検査難民のように患者さんが150人余り押し寄せてくるような状況があったときに、研修医の先生を中心にスピーディに検査して、救命士さんが検体をとって、薬剤師さんは薬の準備をしたり、事務の方が電話やメールなどで検査結果を出したりと、急激に高まった地域の医療ニーズに対してチームで対応できたことは誇らしく思っています。

—— ピーク時のコロナ対応は、体力的にもきつかったのではないのでしょうか。

私はどちらかというと現場よりも戦略を練る立場で動いていたので、現場の皆さんに守っていただいたという気持ちが強いんです。最前線の現場は、間違いなく体力勝負でしたね。途中で燃え尽きないようにコロナ対応の週と非コロナの週を組み合わせながらシフトを組んで臨みましたが、他の診療科の先生も「何か手伝えることはある？」といった感じで協力的でした。大袈裟でなく「運命共同体」として全員で乗り切った実感があるので、当時



のメンバーには今でもすごく感謝しています。単純に頼もしいチームだな、人に恵まれていると感じました。

視野を広げ、学びを得た経験を今後の医療に生かしていく

—— 職員同士の結束力を感じる機会にもなったのですか？

そうですね。コロナ対応を通じて職員同士の距離が近づいて、人間関係が良くなっていった側面はあったと思います。普段は接することがない診療科の先生たちと毎週ミーティングを開いて真剣なコミュニケーションを取っていましたから。それぞれの持ち場によって異なる意見があったので、自分の視野を広げる良い機会になったとも思います。

—— 5類に移行してからのコロナは世間的には収束したかのようになっていますが、実際の医療現場ではいかがですか？

たしかに、ワクチンがかなり行き渡って、ある程度の集団免疫がつくられていると思われます。感染が流行しても重篤化して入院する方はそんなに多くない状況です。コロナ自体は終わってはいないのですが、季節性のインフルエンザと同等くらいの、土着の感染症のような位置づけになってきたように思いますね。

—— 今回の経験で学んだことがあれば教えてください。

自戒の念を込めて言うのですが、医療現場の事情だけですべてを語ってはいけません。それが、私の学んだことです。私たちは、日々の日常の中でバランスを取りながら人間らしい生活をしています。ところが、コロナの感染をおさえるためには、緊急事態宣言のように社会活動を一部制限しなくてはならなかった。その判断は間違っていないのですが、日常を制限されることで、たとえば鬱病になったり、慢性疾患を持った方が病院に行くのが怖くなって診断が遅れたり、薬をもらえなくなったり。病気にならずとも仕事ができず経済的困窮に陥ることもある。そんな感染症とは別のところで生活者が危険にさらされていることを、もっと気づいていかないとはいけません。特に面会制限によって入院当初より急激に病状が悪化した身内を見て家族が困惑する姿もあったので「病院としても他にやりようがあるのではないか？」と思いました。こうした学びと経験を、今後の自分たちの医療に生かしていきたいと思っています。

感染対策メンバーで共有した思い

コロナ禍はもちろん現在も、感染防止対策室次長を務める井上通人看護師長。病院や介護事業所といった施設内でのコロナ感染を最小限に防ぐために尽力したこと、感染対策メンバーと連携する上で大切にしたことなどを伺いました。

災害と同じ危機が、医療現場に迫っていた

— 不確定要素が多かった当時のコロナに対して、どのような意識で動いていったのですか？

大切にしたのは「正しく恐れよう」という意識です。その上で取り組んだことは、自分たちが信じられる情報、正しいと思える情報を吟味して集めること。公的機関、厚生労働省、首相官邸、内閣官房、外務省などがリリースするものを最優先にしつつ、学会から出される文献なども参考に。そうやって収集した情報を共有していきました。あともうひとつ、コロナを「災害」として捉えたことも、正しく恐れるためのやり方のひとつだったかもしれません。

— それはつまり、地震や台風と同じ扱いということでしょうか？

その通りです。なぜなら、世の中から一気にマスクがなくなったように、医療ガウン、個人防護具といった身を守るために使う資材が枯渇していたので、現場はまさに災害時と同じ状況だったわけです。すでに体制として整備されていた災害時の指示系統にオブザーバーとして加わることで、コロナ感染対策チームが生まれたという経緯があります。

— 地域の生活者を支えるために、音羽病院で整備していたことをいくつか教えてください。

4月初めに発熱外来を設け、4月末にはコロナ患者専用の病棟をつくりました。さらに5月のGW明けにPCR検査室を立ち上げて、地域の医療ニーズに応えていきました。とはいえピーク時は想定以上の人たちが検査や外来に来られていたのでひっ迫した状況が続きました。加えて音羽病院は三次救急としての役割も担っているので、そこも無視はできません。実際にコロナ禍での救急車受け入れ台数は過去最高だったと記憶しています。

— 「救急」という機能をそのままに、コロナ感染者をいかに受け入れるか。地域の総合病院としてとても難易度が高い使命を担っていたのですね。

おっしゃる通りです。山科地域における音羽病院の役割をいかに全うするか。最善を尽くして救急患者を受け入れていくんだ。そんな病院としての強い意志を改めて感じましたね。そういった意味では、救急の先生方の考えや行動にとっても感銘を受けました。あとは、やはり組織横断的に様々な職種の人たちが連携し、スピーディにいるんなことを決めて実行できた経験は今後の糧になると思っています。私自身、多くの気づきがありましたし、視野を広げることができました。

— 今後の抱負についてもお聞かせください。

今後は令和6年度の診療報酬改定もあって、音羽病院や洛和会ヘルスケアシステムの中だけでなく、医師会、保健所といった機関と連携しながら、より地域へ出ていくことが求められています。自分が貢献できるフィールドが広がったことに、率直にやりがいを感じています。同時に足もとをしっかりとっておきたい。そんな気持ちもあるので、これからも気を引き締めて邁進していきたいです。



洛和会音羽病院 感染防止対策室次長/井上 通人

それぞれの現場で起きていたこと

今までと変わらない生活を、利用者さんが送れるように。



介護事業部 経営管理部 主席課長/塩見 早人

Q1. いちばん大変だったことは？

コロナ流行当時にグループホームの統括長に着任し、5類感染症に移行した直近まで担当したのですが、ここ数年振り返ると、流行当初は何が正解の予防策なのか特定しきれず、拡大を防ぎきれないときもありました。時間とともに明らかになってきましたが、やはり「初期対応」が本当に大変で、これに尽きると思います。

Q2. いちばん大切にしたい・心がけたことは？

一番は利用者さんが感染しないこと。万が一、感染した場合は拡大させないこと。また、いかたにして職員をサポート・フォローできるかを大切にしていました。私自身も現場に顔を出し、職員とともに感染予防、拡大予防に努めながら、利用者さんが今までと変わらない生活を送っていただけるよう尽力してきましたつもりです。

子どもの預け先がなく困っている、保護者の方々のために。



洛和会若草保育園 園長/土本 紀子

Q1. いちばん大変だったことは？

医療従事者の保護者が多い保育園なので、コロナという未知の不安の中、①保護者の就労を保障する、②子どもの心と身体の発達を促す、③園で働く職員の健康を守るという3つのバランスを取ることに難しさに悩みながら3年間走り抜きました。また、マスク姿で子どもとコミュニケーションを取ることも苦勞しました。

Q2. いちばん大切にしたい・心がけたことは？

職員のお子さんが通っている保育園・幼稚園がコロナで休園になったとき、いち早く緊急一時保育を行うよう要請が来ました。休園の間、子どもの預け先がなく困っている保護者の表情を電話越しに想像し、一定の受け入れ基準を守りながら積極的に安全に保育できるよう受け入れをしていました。

在庫状況を毎日確認し、医療資材を確保することに注力。



洛和会資材センター 課長/長谷川 英太

Q1. いちばん大変だったことは？

資材センターとしては、PPE物品(個人用防護衣)の調達確保が大変でした。感染症での需要増加により、医療用マスク・プラスチックガウン・N95マスクなどが次々と欠品し、毎日状況が変わる状態にありました。日々の業務やクラスター発生時には必要となるため、在庫状況を毎日確認し商品を確保することに注力していました。

Q2. いちばん大切にしたい・心がけたことは？

医療現場の動きを止めないことを最優先に行動しました。医療資材の枯渇に関しては避けようがない事態だったので、医療現場との情報共有を密に行い、完全に欠品した商品に関しては代替品への切り替えを迅速に行うよう心がけました。ひっ迫した状況下においては、現場の運用変更も円滑に進める必要がありました。



3年間の数字で見る、コロナ対応の軌跡

新型コロナ対策チームメンバー



- 院長
- 副院長
- 救急総合診療科
- 呼吸器内科
- 感染症科
- 看護部長
- 管理部長
- 感染管理認定看護師
- 医師
- 看護師
- 薬剤師
- 臨床検査技師
- 放射線技師
- 臨床工学技士
- 臨床心理士
- 事務職

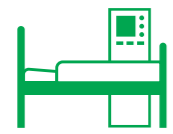
重症入院患者 受入数

計 **1,204** 件 /



(洛和会丸太町病院 …… 274床
洛和会音羽病院 …… 930床)

COVID-19確保病床数



計 **33** 床 /

(洛和会丸太町病院 …… 8床
洛和会音羽病院 …… 25床)

ワクチン接種

総接種件数

計 **10,499** 件 /

(洛和会丸太町病院 …… 3,258人
洛和会音羽病院 …… 7,241人)

発熱外来受診者数

計 **33,032** 人 /



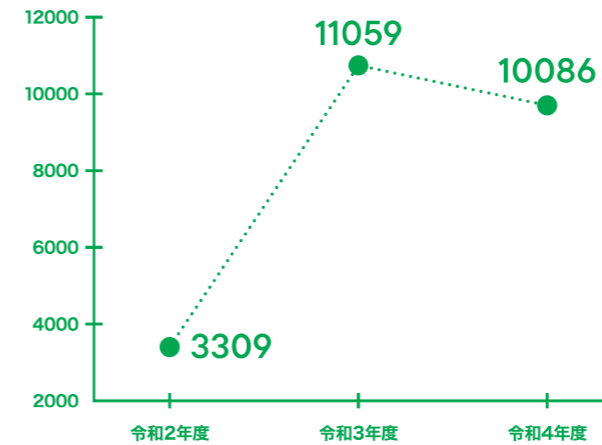
(洛和会丸太町病院 …… 8,849人
洛和会音羽病院 …… 24,183人)

上記のうち、COVID-19検査陽性者数

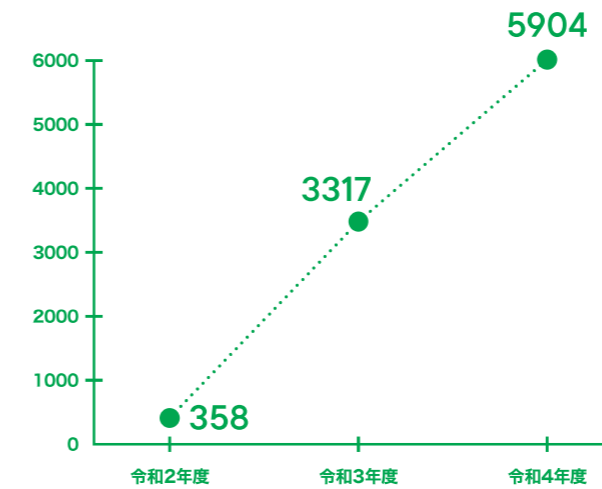
計 **14,663** 人 /

(洛和会丸太町病院 …… 5,084人
洛和会音羽病院 …… 9,579人)

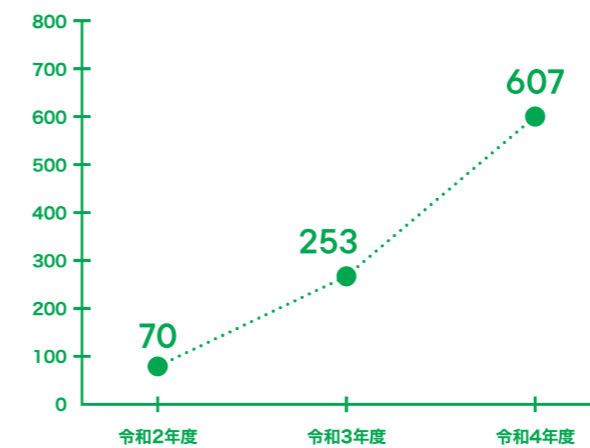
特定外来受診者数 推移



COVID-19 検査陽性者数 推移



COVID-19 入院患者数 推移



各施設におけるコロナ対応

- ➡ 施設入口にサーモグラフィを導入
- ➡ 入院患者さんとのオンライン面会
- ➡ 介護施設入居者さんとのオンライン面会
- ➡ 保育園・児童館にICT機器を導入
- ➡ 巡回バス車内の消毒
- ➡ 施設内の消毒
- ➡ 職員に対する感染対策教育の実施
- ➡ 地域の開業医とのオンラインカンファレンス



おもな社会貢献活動(抜粋)

自転車ヘルメット着用促進モデル事業所



京都初となる「自転車ヘルメット着用促進モデル事業所」に指定されました。交通事故による頭部外傷から命を守るため、職員だけでなく地域の方々に対して着用の促進を進めています。

祇園祭にて「子どもステーション」を設置



2023年7月の祇園祭にて「洛和デイセンター四条鉦町」を休憩所として無料開放。保育士が常駐するほか、授乳やおむつ交換場所を設置するなど、親子で安心して楽しめる空間を提供しました。

9月9日「救急の日」に「救命講習会」を開催



2023年9月9日、救急の日になんで、地下鉄山科駅改札口前にていざというときの心臓マッサージや、AEDを使った救命方法をレクチャーする「救命講習会」を開催しました。

ドナルド・マクドナルド・ハウスへの寄付



公式キャラクター「らくの助」のグッズおよびLINEスタンプの収益を子どもの治療に付き添う家族のための滞在施設「ドナルド・マクドナルド・ハウス おおさか健都」様へ寄付しました。

防犯ブザーを小学校の新入生に寄贈



地元の子どもの安全に貢献するため、山科区内の市立小学校の新入学児童に、公式キャラクター「らくの助」が描かれたオリジナルデザインの防犯ブザーを1,000個寄贈しました。

四宮川の清掃活動



山科区に拠点を置く法人として地元企業が集う「山科美化推進企業協議会」に参加。毎年5月・10月、山科を流れる河川と遊歩道の清掃活動に私たち職員も参加しています。

パートナーシップ(抜粋)

2024.3.28

京都市山科区と 包括連携協定を締結



2023年1月に見舞われた大雪の影響で、山科区ではJRをはじめとするあらゆる交通機関が機能なくなり、多くの帰宅困難者が駅の地下などで待機を余儀なくされました。その経験を踏まえ、何とか地域のお役に立ちたいという思いで、山科区役所と協議を重ね、自然災害に備える包括連携協定を締結。今後は災害時における避難者の受け入れなど防災面での連携を図るほか、様々な施設や人材を活用していきます。公立病院がない山科区で洛和会音羽病院をはじめとする複数の医療・介護施設を長らく運営してきた立場として、民間でありながらこの地域を支える「災害拠点病院」として、災害時も平時も緊密に連携を図っていきます。

2023.10.20

京都府交通安全協会との協定締結

生活上自動車を必要とし、運転を楽しむ高齢者を対象に、加齢に伴う機能の低下を考慮しつつ、安全運転を継続するための取り組みとして『ドラとも』というプロジェクトを一般財団法人 京都府交通安全協会が推進しています。このプロジェクトに賛同し、同協会と協定を締結。私たちからは、本プロジェクトに保健福祉士を派遣し高齢者をサポートするほか、京都府交通安全協会は、洛和会ヘルスケアシステムの職員に対して、年2回の安全運転講習を実施していただきます。

2023.7.24

大和大学との業務提携

学校法人西大和学園 大和大学と、大学の学生および私たち職員の育成にもつながるよう、相互に協力して資源の共用や緊密な情報交換などを行うことを目的とする協定を締結。地域医療の発展および次代を担う医療人材の育成を目指していきます。

2023.10.30

モンベルとの業務提携

日本を代表するアウトドア総合ブランドである株式会社モンベルと、アウトドア活動等の促進、医療や福祉などを通じた地域活性、人々の生活の質向上に向けて包括協定を締結。アウトドアとヘルスケアという双方の強みを生かした活動によって、人々の健康増進に貢献していきます。

2024.1.31

ポラリスとの業務提携

超高齢社会の日本における、社会保障制度の持続性確保に向けて、自立支援型デイサービスを運営する株式会社ポラリスとコンサルティング契約を締結。これまで取り組んできた高齢者の自立支援に加え、ポラリスの自立支援型介護メソッドを、洛和デイセンターウラノスに取り入れることで、利用者さんのより一層の在宅生活支援につなげることを目指します。



福祉用具のレンタル・販売、住宅改修のことなら

株式会社ウエルネットでは、身体機能、住環境、介護環境に合った、利用者さんの自立に役立ち、介助する方も使いやすい最適な福祉用具を提供するほか、住宅改修サービスによって、皆さまの生活をサポートしています。



SERVICE

→ 福祉用具レンタル

対象商品 車いす、特殊寝台、床ずれ防止用具など



→ 福祉用具販売

対象商品 腰掛け便器、特殊尿器、入浴補助用具など



→ 住宅改修サービス



BEFORE AFTER
手すりの取り付けや段差の解消、引き戸の取り換えなど、快適な生活を送れる改修プランを、福祉住環境コーディネーターの資格を持つスタッフがご提案します。

→ スタッフの声



株式会社ウエルネット
山田 都生奈

福祉用具は多種多様で、ご利用される方の状態も様々です。大切なのは、一人ひとりのご希望を理解したうえで福祉用具をご提案すること。これからも、利用者さんからの「ありがとう」という言葉を励みに、生活をサポートしていきます。

「地域の足」として、生活者と医療をつなぐ

株式会社トランスポートは、医療関連サービスマーク認定事業所として、民間救急車、大型介護タクシーといった車両によって、地域の皆さまを病院や介護施設へ迅速かつ安全に搬送します。



SERVICE

→ 民間救急車

2台
同乗者数
4名まで



国土交通省の免許と事業所を管轄する消防本部の認定を受けた患者搬送専門の有料自動車です。緊急を要さない病气やケガの方、寝たままの状態で移動しなければならない方を送迎しています。

→ 大型介護タクシー

3台
同乗者数
6名まで



入退院・通院・一時帰宅・リハビリといった施設との行き来のほか、ショッピングやスポーツ観戦、同窓会、お墓参りといった多様なシーンでご利用いただけます(ストレッチャー対応)。

→ 車内搭載機器・設備の使用料はかかりません。

酸素・吸引・人工呼吸器など、医師同乗、指示のもと医療処置を継続しながら搬送できるよう医療資器材を搭載。京都府全域・滋賀県大津市発着の搬送なら、全国各地どこへでも駆け付けます。



→ スタッフの声



株式会社トランスポート
赤島 栄司

患者さんや利用者さんの状態に合わせて、独歩・車いす・ストレッチャーなど様々な形態に応じた車両を使って搬送します。安心・安全な搬送の後、患者さんや利用者さんから「ありがとう」と声をかけていただくことが、一番の喜びです。

人材育成について

各種研修で優れた人材を育成



新卒職員は約1週間の研修合宿で仲間との絆を育みます。入社後は医師以外の全職種にお姉さん制度(1人の新人に1人のプリセプター=指導者)を導入しています。

内外での学会発表をバックアップ



各部署が日々の工夫や研究結果を報告し合う「洛和会ヘルスケア学会」を年1回開催。学会発表や論文執筆には奨励金制度を設けて推奨しています。

充実したリーダー育成制度



リーダーを育成するための管理職研修を中心に、定期的に若手塾を開催するなど、組織の発展を担う人材育成に取り組んでいます。

全職員が救命講習を受講



医療や介護に携わる者として、必要な場面で的確な行動ができるよう、全職員が救命講習を受講しています。

福祉人材の育成



私たちが運営する介護事業所などにおいて、介護福祉の領域で活躍できる人材を育成する優れた仕組みがあることを、京都府から認定されています。

表彰制度



洛和会MVP賞、MIP賞、ナース・オブ・ザ・イヤーほか、10年勤続奨励金制度、永年勤続表彰制度(勤続20年・30年・40年の職員)、善行表彰制度など、職員を表彰する制度が充実しています。

洛和会TQM支援センターについて

洛和会TQM支援センターでは、各病院、介護施設、関連会社などで様々な業務課題の改善に取り組んでいます。医療・介護現場はとても忙しく、現場でなければ気づけないムダ・ムリ・ムラが置き去りにされてしまいがちです。それらを解消することで、現場で働く職員や患者さんのより多くの笑顔を生み出していきたいと考えています。



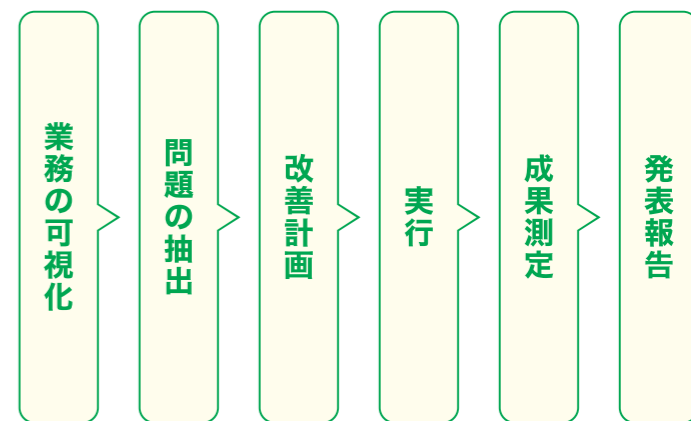
※TQMとは、全員・全体(Total)で、医療・サービスの質(Quality)を継続的に向上させるマネジメント(Management)のこと。

➔ 業務改善の視点

※「QC手法(QC=Quality Control)」と呼ばれる手法を用います。



➔ 業務改善進行フロー



TOPIC

洛和会丸太町病院が「第9回日総研・接客大賞」を受賞

2023年12月、優れた接客マナー・対応サービスを実践している病院や介護施設などを表彰する「第9回日総研・接客大賞」を、洛和会丸太町病院で業務改善を行うTQM委員会が受賞しました。接客対応マナーの向上は、医療看護、福祉介護の現場でも重要視されているテーマ。TQM委員会では、職員間の内部接客向上に重点を置き「接客改善基本行動セルフチェックシート」を作成。病院全体の接客改善を促進するために、年代別や全体の平均値を出すなど、職員間のコミュニケーションや連携をより円滑にする取り組みを行いました。その結果、職員の接客に対する意識が向上し今回の受賞につながりました。受賞に関して担当者は「多職種が協働して取り組み、実践できたことが受賞につながった」と笑顔で語りました。



2025年春、新たな看護学校の校舎が誕生します。

ここで学び、成長し、未来への第一歩を踏み出しませんか？

先進的な施設と革新的な教育が、あなたの夢をサポートします。



校舎新築移転
特設サイトはこちら



- ① **自習スペース／学びを加速させる探究の場**
学生が自習できるスペース。静かな環境で集中し、深い学びを追求できる理想的な場所です。また、医療、看護、介護に関する専門書を数多く取り揃えた図書館を設置。
- ② **食堂／全学年が集まる憩いの場**
ランチや授業の合間の休憩などにも利用でき、学生同士が交流を図れる憩いの場です。
- ③ **玄関／学びの間にリフレッシュ**
ランチタイムには、キッチンカーを招くことも。仲間と楽しいひとときを過ごせます。

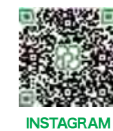


洛和会ヘルスケアシステム
理事長
矢野 裕典

異端であれ

洛和会京都看護学校は、「学問のまち、京都」において、私立病院が母体となって設立した、はじめて、かつ唯一の看護学校です。京都の私立病院で看護学校を運営しているグループは洛和会ヘルスケアシステムだけです。洛和会ヘルスケアシステムは、職員6,441名、施設数188カ所を誇る、京都・滋賀・東京を中心とした、医療・介護・保育・教育・障がい福祉など多岐にわたるサービスを提供する組織で、「日本一働きたいと思われるヘルスケアグループ」を目指しています。本学は、1985年に洛和会ヘルスケアシステム 現会長 矢野一郎が創設しました。創立40周年を迎える2025年には、最新鋭の設備を整えた校舎を新設し、全面移転します。看護学習と実習に最適な図書館も備えており、卒業後も洛和会ヘルスケアシステムに就職した看護師・助産師だけでなく、全ての医療従事者が使えます。少子化が進み学生の希望進路が多様化するなか、新校舎を建てることは、大きな挑戦であり、異端といえるかもしれません。けれど、洛和会京都看護学校と、そこで学ぶ学生の皆さんは、洛和会ヘルスケアシステムというグループにとって、大切な存在であると考えています。なので「必ずやる」と決断しました。このように、本学のコンセプトが、病院自らが看護師・助産師を育成し、病院で専門性を高めてもらうという特徴をもっており、卒業後も一貫した看護教育を提供できることが強みです。40年にわたる本学の歴史の中で、当会以外の病院や介護施設で活躍する方はもちろん、独立・起業する方、大学教授など多様な人材を輩出してきました。本学は他の学業を積んでから、再進学される方が他より多いという特徴があり、また、4人に1人以上が社会人経験者です。社会人を経て看護師を目指す方を、私たちは歓迎しています。既卒の高校生、高等学校卒業程度認定試験から来られる方や、社会人から学生になる人も増えてくれることを願っています。洛和会ヘルスケアシステムのパーパスである「やさしい社会を、創造する。」の実現に向けて、思いやりのあるやさしい看護師・助産師として、社会を支える存在になって活躍していただくことを期待します。

理事長 矢野裕典
SNSアカウント



INSTAGRAM



TIKTOK

<https://www.rakuwa.or.jp>

＼QRコードから
簡単アクセス／

